

2023年6月25日

57号

自然と文化だより

発行: NPOシニア自然大学校
自然と文化科

***** 目次 *****

P1 仲間たちの近況報告(1)

1班 日下部 一一

2班 玉尾 ひとみ

P2 仲間たちの近況報告(2)

3班 曽我 千津子

4班 松平 盛夫

P3 私の玉手箱 猪野 守

P4 樹木ウォッチング 遊上 真一

P5 絵画コーナー 藤川 宗昭

P6 絵画コーナー 中山 勝一

P7 写真コーナー 中川 一成

P8 俳句・ 谷坂 修二

川柳コーナー 山上 恵子

P9 新人紹介



◇自然と文化だより◇

5月8日新型コロナウイルス感染症が第5類に移行した。2020年1月に日本でコロナ患者が発生して以来、3年と4か月の長い間、我々は苦しめられた。当初は感染したら死に直結すると思われ、世界中パニック状況に陥った。緊急事態宣言が発出され、自由に外出が出来ず、経済が回らず、倒産する企業が相次いだ。1年ほど戦々恐々が続き、救いの神、ワクチンが供給されるようになり、接種の取りあいが続いたものの、やっと悪夢から逃れられた。5類に移行して、コロナ前の自由な生活に戻り、あるエコノミストの分析では経済効果4兆2千億円と予測している。マスク着用も規制されず、さばさばした思いだが、この3年間風邪を引かなかったのは、マスク効果であり、我々高齢者にとっては、必要不可欠だ。

Y. T

種を蒔く

1 班 日下部 一一

川西市黒川地区は、日本一の里山と呼ばれ、沢山のクヌギ林があり、現在でも炭焼きが行われている里山である。その一角、桜の森には自生の桜エドヒガンとヤマザクラがそれぞれ 80 本程あり、毎年春になると多くの花見客でにぎわっている。



私はそこで里山保全のボランティア活動をしているのであるが、

6月になると可憐なササユリが咲き私達を楽しませてくれる。ササユリは難しい花で、毎年同じ場所に咲かない。数も少なく、拾った種を自宅の庭で大事に育てることにした。2年前に蒔いた種から今年やっと芽が出た。発芽率 50%、さあどうしよう、これからが大変。開花まで後5年にかかるらしい。でも結果は自然に任せるのが良いと思う。とりあえず今年秋に鉢の土替えを行い、来年秋に里山に返そうと考えている。後は野となれ花となれ。人も自然の一部、自然を制御できるはずがない。ほんの少し手助けを施すことで、近い将来この里山にササユリの芳しい香りが増えてくれることを期待している。

自宅にはササユリの他、エノキ、ヒヨドリバナも発芽している。エノキはオオムラサキのため、ヒヨドリバナはアサギマダラのためである。これらはこの6月に里山に植え付ける。桜の森が春のエドヒガンだけでなく、夏のササユリ、キツネノカミソリ、オオムラサキ、秋のヒヨドリバナとアサギマダラ、そして冬には特徴ある形をした台場クヌギ林とクヌギの炭焼き（菊炭）など、生物多様な里山としての価値を高め、人々に喜ばれて存続できるよう活動を続けたいと思う。

種を蒔き育てることは楽しく、大切である。



絵画と私

2 班 玉尾 ひとみ

30 数年通っていた絵画教室が解散となって2年経った。延び延びになっていた解散が、コロナを契機に現実になったということ。講師のY先生が体調を崩されてからは、いつかはこの日が来ると判ってはいたけれど、最後の日、仲間とお別れの乾杯をした時は胸がつかえた。

毎週火曜日の夜、仕事帰りにほぼ休むことなく通ったJR京橋駅。環状線のガタゴト走る音が聞こえる飲み屋街の古ビルに絵画教室はあった。Y先生と出会ったのは20代の終わりだったか？「絵画教室に入会したい」という私に「絵を描くというのは地味で我慢のいる仕事ですよ！」と強い言葉で釘をさされた。たぶん当時の私の風貌から、遊び半分と判断されたようだ。確かに絵を描くのが好きとか得意とかではなかったし、道具も何一つ持っていなかったのだから、先生の判断は正しかった。それが最後まで残った生徒の一人になるとは不思議なものだ。

夫が言うには、「30 年も”おけいこ”してたら普通、免許皆伝やろ！」確かに花道や日本舞踊なら師範級に上達して、先生と呼ばれていてもおかしくない。しかし絵というのは、何年習ったとしても進歩は限定的だ。つまり才能の問題！

先週、国際美術館で「ピカソとその時代展」を観た。ピカソの父親も画家だったけど、息子の圧倒的な才能に画家を辞めてしまったという。その天才ピカソやクレー等 20 世紀の画家達は、尊敬していたセザンヌの絵をそれぞれのやり方で模写していた。模写は自分の求める構図に辿り着くために、有効な方法なのだろうか？

この2年間、私は絵を描いていない。元気な今は、アウトドアに集中したいと思う。絵は外出できない状況になってからと考えて

ている。そうだ！模写がいい！もっと美術館に出かけ、好きな画家の図録を集めておこう！読みたい本、観たい映画も今から列記しておこう！と、将来のために、準備をはじめている。



わが家のとちの木

3 班 曾我 千津子

狭い裏庭にとちの木が 14 鉢ある。

10 年前、旅先のハンガリーで、教会の庭に立派な大木があり、栗に似た実が一杯落ちていた。見上げると大きな葉を広げ、陽を受けてたいへん美しかった。3 つほど拾いポケットに入れた。

当科の皆さんはこれを読み、驚き、呆れ、非難の声をあげておられることだろう。

植木鉢の片隅に埋めておいたら発芽した。その内の一本は、今 150 cm になっている。



発芽がうれしく、とちの実を拾ってきてはせっせと植木鉢に埋める。

鉢が狭苦しくなったら植え替える。春には大きな冬芽を開き、あっという間に葉を出す。三日見ぬ間に葉

を広げ、風に揺れている。夏が終わる頃には葉を枯らし、やがて大きな葉を落とす。

葉が青々と美しい5月になると、この葉を丸く切り取っていく虫が、決まったようにやって来る。手間暇かけずほったらかしではあるが、傷つけられたくはない。

調べてみると、「ハキリバチという昆虫の仕業。切り取ってきた葉を材料にして巣を作る。同じ場所に戻って繰り返し葉を切り取る」とある。

巣作りのためなら仕方ないか、なんてことは思わない。等間隔に丸く切り取られた葉は、アートのようなものもある、などと感心してはいられない。何とか被害を食い止めたい。大きな葉にネットをかけてみる。しかし敵もさるもの、上がダメなら下からと、プーンと羽音を響かせながら、何度も攻め入ってくる。ネットだけで 14 鉢は守れない。



6 月に入っても被害は続く。奮闘努力の甲斐もなく、今年も無傷の鉢はない。

6 月に入っても被害は続く。奮闘努力の甲斐もなく、今年も無傷の鉢はない。

あちこち切り取られ、葉の形が変わってしまった無残な姿を眺めながら、「どうする来年」？

蒲生八幡神社の大楠

4 班 松平 盛夫

昨年から専科観察コースのお手伝いをさせて頂いています。第 1 期観察コースでは、2 月 13～15 日に鹿児島へ修学旅行に行きました。その目玉の一つが、蒲生八幡神社境内の日本一の大楠でした。

大楠の前に立った時、全員から「おー」という歓声が上がりました。



樹齢約 1,600 年、根周り 33.5m、目通り幹囲 24.22m、高さ約 30m、日本で一番大きなクスノキということは、もちろん知っていました。しかし、実際に現物を前にすると、その大きさの迫力だけでなく、生命力の様な神秘的な感覚を肌で感じました。

ガイドの方の説明では、保護のために盛土をしたため、樹の根元は約 2m 近く埋もれており、本当の根回りはもっと大きく、子供の頃は根に登って遊んだそうです。天然記念物に指定され、登ることも触ることも出来なくなって残念な面もあると話されていました。



出前授業では、34mのロープの輪で、小学生にその大きさを実感して貰いますが、その生命力はどうやって伝えたら良いのでしょうか？

私の高等科 19 期は、コロナ過で、ほとんどの講座が中止でした。専科では半分講座生の感覚で楽しくお手伝いさせて頂いています。

インゲン豆から学ぶ

2班 猪野 守

新型コロナが広がる数年前、私の家系の宗教との関係があり、京都宇治市にある黄檗宗大本山の寺院「萬福寺」山号は黄檗山に行ってきました。

お寺は中国僧福建省福州府に生まれ、長崎の興福寺の招きで日本に渡来した「隠元隆琦（いんげんりゅうき）禅師」によって開創されました。日本でいう「禅宗」は、臨済宗、曹洞宗、黄檗宗の三宗に分類されています。

萬福寺の建造物は、中国明朝様式を取り入れた伽藍配置だそうです。代表的禅宗伽藍建築群として、主要建物 23 棟、回廊、額などが国の重要文化財に指定されています。

ご存じ隠元禅師はインゲン豆を中国から持ち帰り日本に広めたほか、孟宗竹、スイカ、レンコンなどを日本にもたらしたといわれています。



お寺の回廊の横の立て札

ちょうど今日、自宅の夕食はバラずしで、きれいな緑のインゲン豆がちりばめられていて、詳しく知りたくなり、余っていたスーパーから買ってきた豆を調べてみました。

まず、豆を開いて中の種子を調べようと、縫合線（背軸側）を少し取り、そこから開けてみたところ、いろんな実のつき方をします。反対側の縫合線（向軸側）に種子はついていきます。

左右交互につくもの、一方のサイドにばかりつくもの、ばらばらにつくもの……。

これは、何かの法則があるのかと、私が植物を学んでいる長居植物園の学芸員に位置関係の変化についてお尋ねしたところ、「種子は種子に栄養分を運ぶ縫合線に付いていて、背中を開くときにその筋がどちらに寄っているのかで変わってくる、原則はありません」とのことでした。なあんだ……そ

うだったのか？

「正確には、果実の向軸側（葉で言うと表側）の縫合線につきます」とのこと。



種子のつき方はいろいろに見られる
背縫線がどこで避けるかによる

隠元禅師が日本に持ち帰ったものは、実は「ふじ豆」という別の種類の豆であったとの説もあります。インゲン豆は「菜豆（さいとう）」と呼ばれ、白色系と着色系があり、白色系は「大福豆（おおふくまめ）」、「手亡（てぼう）」、「白金時豆」などがあり、着色系では、単色と斑紋入りがあり、単色の代表は「金時豆」で、へその部分を除いて全体が鮮やかな赤紫色をしています。斑紋入りは、さらに斑紋が種皮全体に及ぶ普斑種（ふはんしゅ）と、一部分にとどまる偏斑種（へんはんしゅ）とに分かれ、普斑種には「うずらまめ」、偏斑種には「虎豆」があります。



カラスノエンドウの部位の名前

樹木 ウォッチング

2015年3月号から8年間にわたって 樹形ウォッチングを掲載してきましたが、そろそろ ネタが尽きてきました。今回からは 木々が生きてゆく様子を 樹木ウォッチングとして ご紹介いたします。

イヌエンジュの展葉

3班 遊上 眞一



1月11日 展葉 0 冬芽。芽鱗に短毛が密生



4月12日 展葉 1 冬芽が開く。折りたたまれた葉は、指のようです



4月19日 展葉 2
折りたたまれていた複葉が開き、
銀白色の軟毛が密生した
個葉 1枚1枚が 識別できる
大きさになりました



4月26日 展葉 3
個葉面積が 成熟時の半分以上になる



7月5日 展葉 4 展葉が完了しています

縄文杉

4班 藤川 宗昭



サクマ式ドロップス

2班 中山 勝一



春の息吹 撮影場所 八幡市背割り堤

2班 中川 一成



俳句

4 班 谷坂 修二

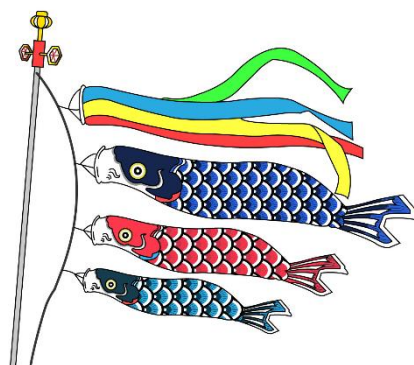
- ・ 山眠る裾野がどこか笑ってる
- ・ この山もこの軒先も春近し
- ・ 雪山がスキーに來いと誘えり



俳句

4 班 山上 恵子

- ・ お土産はシートに紛ゐる花片
- ・ 川の面おおひ尽くして鯉幟
- ・ 稜線のぼんやり見ゆる梅雨の空



川柳



- ・ この年で今でも迷える子羊で
- ・ 要らん時持って要る時持たぬ傘
- ・ 子供の日年寄りばかりが街にいる

新人紹介コーナー

①：氏名 ②：所属 ③：講座生の期 組
④：住所 ⑤：他の所属 ⑥自己紹介

	①：日下部 一 ②：1 班副班長 ③：26 期緑組 ④：川西市 ⑤：里山保全ボランティア 「菊炭友の会」		①：近藤フミ子 ②：2 班副班長 ③：20 期緑組 ④：芦屋市 ⑤：鉾物クラブ
⑥ 近くの里山で保全活動を行っています。 生まれが田舎者で山や自然が大好きです。 樹木や草花のこと、もう少し勉強したく入会しました。		⑥ 植物など色々観たくて入りました。 よろしくお願いいたします。	



57号に投稿頂きました皆様、
お陰様で無事発刊することが出
来ました。ありがとうございました。
次号も引き続き皆様のご
協力をお願いいたします。

広報委員会

